

第4回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル

日時:令和5年12月23日(土)

場所:市本庁舎 18階研修室

参加者:市民委員20名、構想日本・コーディネーター、市・事務局

コーディネーター:構想日本 構想日本総括ディレクター 伊藤 伸

コーディネーター:構想日本 プロジェクトマネージャー 柏崎 亮太

コーディネーター:構想日本 特別研究員 定野 司

開会

<省略>

コーディネーター:

本日が最終回となる。これまでの皆さんとの議論や改善提案シートの内容をもとに提案書を作成した。本日議論した内容を最後に反映させるため、今日完成するものではない。

<資料説明>

○「はじめに」は今後追記する予定。

○「子ども目線で子どもファーストを考える」と「子どもを真ん中に置いて子どもファーストを考える」に大別される。

○各班の主な議論の内容は以下のとおり。

**A班**公園や道路等、大人は問題なくても、子どもにとって危険な箇所等を改善していく。

**B班**子どもを真ん中において、学校や保育士等との関わりの中で、子どもファーストをどう実現させていくか。

○東大阪が考える「子どもファースト」とは、「子どもの有無に関わらず、社会全体が子どものことを優先に考えていく」こと。

○提案は全7項目にまとめた。

すでに市として実施しているものも含まれている。この後提出する提案書については、市に対し拘束力があるわけではない。「市ですでに実施しているので周知に力をいれていく」、「今すぐは実施できない」等、最後は市の判断になることをご理解いただきたい。

①子どもにとって安全で魅力ある公園・遊び場をつくり、存在を発信する

②自由と安心・安全を両立した子どものための居場所をつくる

③子どもに迫る危険を最大限なくして、子どもの安全を確保する

④多様な体験ができる機会をつくり、子どもの可能性を伸ばす

⑤子どもが自ら相談できる環境をつくり、かつワンストップで相談対応できるように組織間の繋がりをつくる

⑥子どもの特性や関わり方などの情報を各組織で共有できるネットワークをつくる

⑦子どもの情報を共有化し、子どもと潜在的なスキル保育者との繋がりをつくる

委員：

①～⑦のすべてを実現できれば、東大阪は「素晴らしいまち」となり、全国から人が押し寄せるのでは。取り組みにあたっては、KPI や評価指数を設定する必要があると考える。

また、⑥についてはデータを積極的に取っていき、今だけでなく将来にわたって分析を行うことが望ましい。成功や失敗を他市と共有していけるといい。中小企業が多いまちなので、それらを巻き込み、市外から仕事で来られる方の目に東大阪市が魅力的に映るようにしたい。子ども目線での取り組みを体験してもらえる機会があるといい。

コーディネーター：

目標設定はどんなものにすればよいか。

委員：

「公園に子どもの数が増えた」や「子どもの笑顔が増えた」等。

コーディネーター：

定性的にはなるが、何か数値が取れるといい。

委員：

障害児の目線ではどうか。ベビーカーや障害児のことを提案書に盛り込んでもらえると。障害の程度は個人差がある。日常生活に問題がなくても、学校生活を送る上で苦手な部分があると、保健室登校あるいは不登校になってしまうケースも。そういった子どもたちが通える場があるといい。「誰でも」という視点があれば、障害(車いす等)のある子どもも通いやすくなるのでは。

委員：

市の取り組みの中には、顕在化しないあるいは必要な人に届いていないものもあると感じる。期間や予算の問題ですぐに着手できないものもあれば、効果が出るまで一定時間がかかるものもあると理解するが、市民に対して定期的に現状の見える化、あるいはフィードバックが必要だと考える。効果検証の手段としては、子どもたちの声を聞くことだと考える。本当に子どものためになっているかは、当事者である子どもに聞いてみないと分からない。市在住の子どもたちから無作為で意見を聞くことができれば、その声をもとに、新しく取り組むか、既存の取り組みを継続していくか検討できるのではないか。

コーディネーター：

本当に子どものためになっているか考えていかなければならない。

今日は委員の中学生のお子さんにお越しいただいているので、提案書の感想を聞きたい。

また、今の学校や東大阪市の環境が子どもにとってどうなのか、教えてほしい。

委員：

ネット依存の問題に関心がある。学校からタブレット端末が配布されており、Wi-Fi 環境がある以上、ネットから離れることができない。ネット依存に対して大人が子どもに働きかけをしてほしい。

委員：

ネットは便利で手軽なので、のめりこんでしまう。大人がネット以外のコミュニケーションや遊び方を提案することができれば、意外と乗ってくれることもあると思う。今の子どもたちは、生まれたときからネットが存在し、ネットがない環境を知らない。まずはネット以外のものを知る機会をつくることができれば、生まれたときからネットと共にある世代に「ネット依存はダメ」と言ってもピンとこないはず。

コーディネーター：

学校として、ネットを遮断し、ネット以外のことに集中できる時間を設けることはできる。

委員：

提案書はよくまとまっている。このようなまちになれば、この先も住みたいと思う。効果測定や子どもの声を聞くことは大事だと考える。幼少時、ネットがそれほど発達していなかったので、公園でカード交換やポータブルゲームをやっていた。今の子どもたちも公園にゲーム機を持ってきて遊んでいる姿をよく目にし、あまり変わらないように感じている。塾に行く子も多い。一方でボール遊びをしている子どもは見かけなくなった。幼いときからスマホやゲーム機の画面ばかり見ていると、目を悪くすることも。親やまち・地域の働きかけで、子どもたちがデジタルデトックスできる時間や場所を提供できれば。

コーディネーター：

デジタルデトックスについて、ご自身ではどうか。

委員：

家では家族とリビングに集まってテレビを見て過ごすことが多いので、スマホは手放せていると思う。

コーディネーター：

家族の時間を作るのはよい。

委員：

学校内で携帯を使用する子どもが増えているのでは。対策の1つとして、校内で電波を遮断する時間を設定してもいいのでは。

コーディネーター：

技術的には可能だが、そこまでやるかどうか。

コーディネーター:

取り組んでいる学校もある。ネット依存の大人も多いので強く言えないのが現状。だからこそ学校で取り組む必要がある。ネット以外で魅力のあるものを見つける機会を、どれだけ子どもたちに与えられるか。

委員:

子どもが家に遊びに集まると、昔であれば何をして遊ぶか話し合っていたが、今は全く喋らず各自携帯やゲームをしている。本当にコミュニケーションが成立しているのか怪しい。部屋にこもる時間が増えているように感じる。子どもが外へ出ていく時間をいかに増やすか。その方法を模索すべき。

コーディネーター:

遊び場が魅力的になれば、そういったことも実現できるのかもしれない。

委員:

③のインフルエンサーによる SNS での発信について、どうしても見たいもの以外はスルーしがち。あまり効果がないのではと思う。学校で印象に残るイベントがあるといい。私自身中学生のときに、スタントマンを入れた交通教室があった。

コーディネーター:

今もあるのか。

委員:

昨年受講した。

コーディネーター:

すべての学校で実施されているのか。

事務局:

全ての学校ではないが、毎年順番に実施。内容は単なる講習ではなく、スタントマンを呼んでいると聞いている。1年で3校ほどと聞いている。

委員:

⑤の相談窓口のワンストップ化については、いじめが起きたときの対処にかかる内容だが、③でいじめが起きないように、子どもに対していじめ抑止の意識を向上させるような発生予防的な内容を入れてはどうか。

コーディネーター:

LINE の活用状況は。

事務局:

タブレット端末に相談できるアプリをインストール済み。もう少し便利にできないか検討しているところ。

コーディネーター:

仮に LINE で相談があった場合、その LINE メッセージは誰が見ているのか。

事務局:

相談については、先生の負担を減らすため、まずは委託事業者が受けている。

コーディネーター:

大津市では、いじめ相談について LINE を活用したことにより、1 週間の相談件数が 200 倍まで増えたと聞く。相談時間は自由だが、相談の5割が 23～24 時台。若者が使うツールはほぼメッセージ。電話で伝えるより、メッセージで伝える方が自分の気持ちを伝えやすい。良い・悪いといった話ではなく、既にそういう状態であることを前提に施策を構築していかなければならない。

委員:

幼稚園教諭で今回が初めての参加。障害児に関して、小学校へ進学するにあたり、支援学級や支援学校に入れたくないと考える親が多い。立場的に、子どものことを考えると、支援のあるところを選択してほしいと思っている。グレーゾーンの子もたちが増えていると聞く。入学へのハードルが下がるといい。市の申請窓口も「障害」と付いていて、心理的ハードルが高くなっていると思う。子ども課みたいな中に入れてもらえれば。また、4 歳以降は保健師とつながりが薄くなってしまうことも問題。

プライバシーの保護も重要ではあるが、進学等の引き継ぎにあたって、子どもの健康や特性等の情報共有が市や学校関係者等の間でできるようになれば。

コーディネーター:

足立区では子どもに関わる部分をできる限り教育委員会に集中させ、ワンストップかつ心理的ハードルの低い窓口になるようを心がけていた。また、就学相談の前に全員にアンケートを実施している。

事務局:

進学にあたっては、支援が必要な子どもの情報について庁内で共有しながら進めている。全体アンケートの実施はできていないが、就学前健診の中でヒアリングを含め、子どもの状態を見つつ取り組んでいる。

委員:

最近宿題等もタブレット端末を活用。そうなる、いつの間にかタブレットで遊び始めてしまう可能性が高い。ペーパーレスの時代ではあるが、紙を活用することで宿題に集中せざるを得なくできるのでは。

コーディネーター：

タブレット端末であれば進度別の宿題を出すことができ、便利な面もあるが。

委員：

幼稚園に登園するギリギリまで子どもにタブレットを見せ、帰るときは子どもにすぐタブレットを手渡している姿をよく目にする。一方で最近、子どもに注意をすると「なんでうちの子だけ」といったクレームが増えてきたように感じる。

コーディネーター：

学校であれば、ネットを使わない時間を設けることができる。教員の力量にかかってくるが、学校を魅力的な空間にすること、楽しいと思える授業にすることが求められる。

委員：

子どもがなかなかゲームを手放さない。習い事等ゲーム以外のものに目を向けられるよう努めている。ゲーム障害は深刻。恐ろしさを広く周知したほうがよい。

コーディネーター：

消費生活センターにおける相談のうち1番多いのは詐欺だが、2番目は課金。海外では明確に「ネット依存＝病気」と取り扱っている。さらに治療に対してのハードルが低い。

委員：

あらためて子ども目線に立つことの難しさを感じた。また、子育て中の方の生の声を聞いてよかった。今回は無作為で選んだ市民を委員とした会議であったが、子どもたちの意見を聞く場も必要だと考える。自分ごと化会議の学校バージョン、市職員と児童・生徒が意見交換できる場、市職員と地域が同じテーマで考えられる場があるとよいと思う。ただ、そういった場は市への要望ばかりになってしまいがち。自身に何ができるかという観点で意見をしてもらえれば、お互いによくしていける案が出るのではないか。

コーディネーター：

これまでに生徒が大人と議論する場はあったか。

委員：

代表者会議と呼ばれる、各委員と校長・先生が同じテーブルに着く場がある。ただ、先生と話し合うというよりは、生徒同士で話し合う場となっている。

委員：

①について、自主的に行うのはなかなか難しい。家の近くにある企業が、毎朝掃除されている姿を見ると気持ちがいい。自分の勤め先は半年に1回程度で、効果あるのかどうか。そういったことを企業等に願えないものか。

コーディネーター：

市ではどうか。

事務局：

市役所周辺清掃を週に1回、各部局持ち回りで行なっている。

委員：

先ほどの話で、ネットの長時間使用を大人が好ましく思わないのは、子どもがやるべきことを後回しにしている、もしくは他の機会を失っていると感じるから。ネット以外の時間の使い方を、大人が子どもに提案できるといい。ネットを活用したほうがいいもの・リアルで体験したほうがいいものを仕分けし、コントロールするのが大人の役目である。提案④と⑦を1つにまとめられないか。多様な体験と潜在的スキルを持つ人を掛け合わせることで、子どもたちの将来の可能性を広げることにつながる。学校において、長期休暇の前や月に1回程度、子ども同士で時間の使い方や将来したいことについて話し合う機会を設けてはどうか。OB・OGを活用してもいい。子どもは選択肢があることを知らせてあげないと、目の前のことしか考えられない場合が多い。目標を明確に設定できれば、逆算し、今やらないといけなことが見えてくる。今やネットのない生活はあり得ない。使用を制限するのではなく、ネットとの上手な付き合い方を考えていくべき。

コーディネーター：

禁止や制限は逆効果。どうやって上手く利用していくか。キャリアデザイン教育のための時間は今もある。それをどう効果的に活用していけるか。ヒト・モノ・コト体験を大事にできるといい。実際の仕事内容が見える職場体験も子どもたちにとっては貴重な経験になる。

コーディネーター：

ネット依存は深刻だが、今更50年前のネットがなかったときには戻れない。どのように技術を活用していくか。AI技術も予想をはるかに上回るスピードで進歩している。先進国であるエストニアでは、すでにAI技術の被害額が億越え。あくまで使用するのは人間なので、使い方についてよく検討することが必要。

委員：

1歳の子どもがいるが、食事に集中できないとき、気を紛らわせるための手段として動画を活用する。すると今度は動画を見ることに集中してしまう。最近は「ご飯を食べ終わったら動画を見よう」と粘り強く説明することで聞いてくれるようになった。結局は、どう使うか。子どもは大人のやることをよく見ている。

親の時間の使い方を子どもたちは真似ていくのではないか。そもそも親自身がネットの正しい使い方を心得ているのか。30代であれば、中学・高校あたりで携帯を持ち始めた人が多いと思うが、自分たちの親からネットの使い方を教わった人は多くないはず。親自身がネットの正しい使い方・付き合い方を学ばないと、子どもたちに教えられないと思う。

コーディネーター：

各家庭内でルールを話し合うタイミングが必ずある。そのチャンスを逃さないように。

委員：

答えは1つではない。家庭によってやり方が異なるはず。決めつけることがないようにしたい。

コーディネーター：

提案の中で重なる部分があれば、統合していく。先ほど意見があったように、④と⑦は合わせたい。また、「ネットとの付き合い方」及び「子どもと大人の交流の場」を新たに提案項目として追加したい。

コーディネーター：

大人が考える「子ども目線」には限界がある。通学路における危険箇所等について、子どもの声を実際に聞くことが大事。

委員：

公園は子どもにとって大切な場所。だからこそ、子どもにとって面白い・利用しやすい公園になれば。

コーディネーター：

公園は子どもだけが使う場所ではない。大人の意見とぶつかったとき、どう調整すればいいと思うか。

委員：

子どもの意見を取り入れることができればいい。

コーディネーター：

世代間で意見交換できれば。

委員：

公園に行った際、遊びの中身や時間に制限が設けられており、ゲートボールをされる高齢者のための場所になっていた。それも悪くはないが、子どもにとって使いやすい場になればいい。

コーディネーター：

すべての公園においてボールの使用が禁止されているのか。

事務局:

公園内での“危険行為”を禁止している。ボール遊びについては解釈が難しい。花火や焚き火、BBQは禁止している。

コーディネーター:

ボール遊びができる公園、ゲートボールができる公園、花火ができる場所等、特色ある公園運営ができるといい。

コーディネーター:

すべての公園で禁止するのではなく、できる公園を作っていく、もしくは差別化していくことが皆さんの同意ということによろしいか。

委員:

学生時代にいじめに関するアンケートがあった。その結果がどのように使用され、どのように自分たちに還元されたのか、知らされることはなかった。自分自身いじめられた経験があるが、アンケートにそのことを書けなかった。アンケートに関して、データのとり方や真正性に疑問がある。見える化してほしい。

コーディネーター:

東大阪市の状況は。

事務局:

アンケート実施については、時期・回数等は学校に任せているが、定期的に行っている。

コーディネーター:

アンケート手法は1つではない。自宅に持ち帰っての回答やオンラインによる回答等の検討も必要。

委員:

会議当初、考えや思いはあまり強くない方だと思っていたが、皆さんと議論を重ねていくうちに、自分の考えや思いに気づくことができた。提案を市に提出して終わりではなく、自分が今後どう行動していくのかを考え、市がどうなっていくのかを注視していかなければならない。そう考えると、提案の項目数が多いように感じている。項目数が多いと、最後まで追うことが難しくなるのでは。まとめられるものは、まとめてもよいと思う。

コーディネーター:

他市に比べると項目数はやや多い。確かに項目数が多いと、進捗状況を確認することが難しくなる。すでに行っていること・できたこと・できない場合はその理由を、市が市民に対して見える形で示すことが重

要。また、行政だけが取り組むのではなく、この会議が終わった後も個人でできることに取り組んでいくことも必要。会議終了後に OB・OG 会を作っている自治体もあると聞いている。

委員：

しっかりまとめられた提案書だと感じている。今回、さらに色々な意見が出た。参加できてよかった。

委員：

貴重な経験であった。子どもファーストの考え方が色んなところに広がっていけばいい。テーマに応じて子どもが参加できるような会議になれば、もっといいものになると感じた。

コーディネーター：

①と②、④と⑦を 1 つにまとめ、「ネット依存」及び「子どもと大人の交流」を追加することで全 7 項目にしたいと考えている。

市長：

市では様々な会議や審議会を開催しており、中には、公募という形で市民の方に委員をお願いすることもある。今回はさらに色々な方の意見を伺えるよう、無作為抽出という形で皆さんをお願いすることになった。東大阪市の 57 年間の歴史の中で、初めての取り組みであった。先日の市長選では、「子どもファースト」「次世代の投資」「子ども真ん中」の思いを公約に掲げた。今回は、同時期にこのラウンドテーブルが開催されていたことから、この提案を受けとめ、全庁的に検討のうえ市としての政策構築を行っていきたいと考えている。もしかすると、今回いただく提案の中には、市としてすでに取り組んでいるものもあるかと思う。そういった部分についても、なぜ市民の皆様には伝わっていないのか、しっかりと提案を受けとめて、これからのまちづくりに反映させていきたい。

これまでの過去を振り返り気づいたことは、誰かが言わないと変わらない、ということ。自分だったらこうしよう、と今いる場所で表現・主張することが大事であると思っている。そういった意味でも、今回のラウンドテーブルが市への要望という形ではなく、委員の皆様が自分ごととして捉え、考えることにより、東大阪市の未来につながるものと感じている。

これまでの皆様の議論を東大阪の未来へ生かしていくことが私たちの仕事。私も職員も全員で頑張っていく。ぜひ一緒に取り組んでもらえると嬉しい。

コーディネーター：

人間の脳は興味のあるもの・意識しているものに目がいくようにできている。今回のラウンドテーブルに参加することで、子どもに関することについて、これまで以上にアンテナが立ったのではないかと感じている。この経験をきっかけに、一緒に東大阪を作っていけると嬉しい。

コーディネーター:

これまで、子どもの問題は子どもを持つ親の問題であった。しかし、全4回の議論を通して、そうではないとあらためて感じた。子どもはいずれ大人になる。今の子どもの問題は将来の東大阪市の問題、あるいは日本の問題であり、いずれは世界の問題というところまで広がっていくのだろうと思っている。

コーディネーター:

皆さんから一言お願いしたい。

委員:

様々な立場の方の色々な思いを聞くことができ、見識が深まった。自分に何ができるかが明確になった。市の取り組みの成果も見していきたい。

委員:

課題について、皆さんの意見を聞くことができ、参加できてよかったと思っている。無作為抽出だからこそ、より深い意見が出たのではないか。今後、子どもに対しても同様に無作為に意見を集められるとよい。

コーディネーター:

無作為抽出により選ばれたメンバーで議論することで、誰が言うかではなく、何を言うかで提案書ができた。日本は特に誰が言うかで判断されることが多いので、こういった場合は貴重。

子どもファーストは言葉自体きれいだが、実際にやるとなると尻込みをしてしまう。その中で市長の公約に子どもファーストが掲げられたことは非常に大きいこと。その考えをどう具現化するか、今回の提案書がその1つの参考になると考える。これらの提案が東大阪市にどうつながっていくか注視してもらいたい。また、住民もしくは地域での取り組みについては、皆さんにしかできないことも含まれている。実際に取り組んでいただくことで、結果的に子どもファーストな東大阪市につながっていく。私もできる限り東大阪市に関わっていきたい。

事務連絡

閉会

<省略>

当日ご参加された4名の傍聴者様より以下のとおりご意見を頂戴しています。

○このような場に参加できて楽しかった。学んだことをこれからに活かしたい。

○子どもの日常は冒険。どうやって冒険させてあげられるか。いち民間企業の立場で、子どもを対象とした社内見学の受け入れは可能かと思っている。その他、外壁のペイントといった意見が社内に出ているものの、子どもの安全性の確保が不十分であることから断念。また、外の警備員が子どもに挨拶程度の声かけを行っていたときもあったが、声かけ事案と捉えられないことから、今はやめている。企業としてやりたいことがあっても、その先のリスクを考えると手を出せないことが多い。

○委員の皆様の活発な意見を聞くことができ非常に面白かったし、多様化の時代に入っていることを改めて感じた。社員から、ドリーム 21 が市内外問わず人気であると聞いた。そういった魅力ある場所を増やすことができれば。

いち民間企業として、見学可能な環境や、Wi-Fi が整備された、ちょっとした遊びが可能な場所づくりができればと思っているが、価値観が多様な今、一部の方からの反発を恐れ、取り組むにあたっては二の足を踏んでしまう。ただ、今日の話聞き、あらためて企業としてできることを考えていかなければならないと感じた。

○子どもと一緒に参加したのだが、子どものために別に控え室を用意してもらった。子どもと一緒にでも不自由なく過ごせるような、または、大人の間であっても、子どもを温かく迎え入れてくれる社会を作っていけたらいい。